



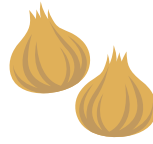
営農 インフォ

野菜

たまねぎ

◆病害虫防除

曇雨天の日が続くと、べと病や白色疫病の発生が多くなる。常発地や排水の悪い場合は要注意である。溝を切って排水を良くするなど、耕種的防除に努める。発病を認めた場合は表1のいずれかの薬剤を散布する。また、白色疫病が発生した株は灰色腐敗病を併発しやすいので注意する。灰色腐敗病は表1のいずれかの薬剤で予防する。



じゃがいも

◆施肥

定植は3月下旬～4月下旬に行う。定植の2週間以上前に、苦土石灰を10a当たり80～100kg施し、荒起こししておく。元肥は、定植の1週間程度前にチッソ・リン酸・カリを各成分で、10a当たり14～15kg施用する。生育後半の肥料切れを防ぐため、緩効性肥料を中心にするが良い。
◆植え付け
種いもの芽が2～3cmぐらい

に伸びた頃、10cm程度の深さに植え付ける。砂壤土ではやや深く、粘質土ではやや浅くする。

植え付けの際には、種いものを大・中・小に分別し、大きいものから順に植え付ける。

◆マルチング

定植後はできるだけ早く黒マルチをかける。

発芽後、マルチの穴あけが遅れると芽が焼けるので、遅れないように注意する。



水なす

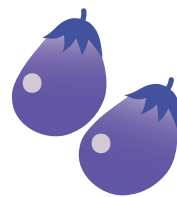
◆病害虫防除

ハウス栽培では、灰色かび病やすすかび病の発生に注意する。特に曇雨天の日が続くなど天候不順の場合は、葉が軟弱になり病気の発生が多くなりやすいので、日中は換気に努め、ハウスが過湿にならないように注意する。

発病した葉や果実は見つけ次第、ハウスの外に持ち出して処分する。薬剤防除を行う場合は、高温時を避け、晴天の日の午前中に行い、夕方ハウスを閉めるまでに散布した薬液が乾いているようにする。ハウス内が高温になる時には、薬害の恐れがあるので注意する。

薬剤については表2、3を参考にし、系統の異なる薬剤を選びローテーション散布する。

薬剤については表2、3を参考にし、系統の異なる薬剤を選びローテーション散布する。



ほうれん草

◆は種

ほうれん草の花芽分化は長日、低温によって誘起されるため、3月以降は、春まき用の晩抽性品種を用いる。

◆病害虫防除

降雨が続くと、べと病の発生が多くなる。抵抗性のある品種を用いるとともに、発生前からの予防的散布や、発生初期に表4のいずれかの薬剤を散布する。



じまつな

◆は種

生育適温になるので、品質の

良い品種を利用する。

◆肥培管理

気温の上昇とともに土壌が乾燥してくるので、日中の暖かい時間にかん水する。

◆病害虫防除

ハウス栽培では白さび病の発生に注意する。特に湿度が高く、露がつく状態が続くと発生が多くなる。は種量を適正にするなど過繁茂にならないような管理を行う。発生した場合は、表5の薬剤で防除する。

しゅんぎく

◆病害虫防除

マメハモグリバエの吸汁による被害が多くなる時期であるため、それを防ぐために、表6のいずれかの薬剤を害虫発生初期に使用する。



軟弱野菜

◆ハウスの病害虫防除について

ハウス栽培ではハウス内への害虫の飛び込みを防ぐため、ハウスサイドやハウスの出入り口に防虫ネットを被覆すると効果

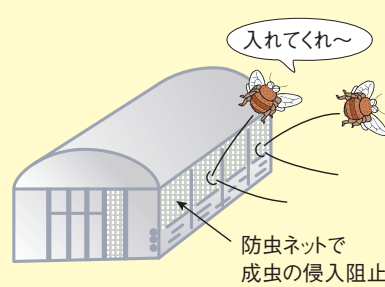
農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

1mm目合いのネットが有効な作物と害虫

作物名	害虫名
なす、トマト、菊	アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類、オオタバコガ、ヨトウムシ類
しゅんぎく	アザミウマ類、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類
こまつな、大阪しろな	アブラムシ類、コナガ、ヨトウムシ類、ハイマダラノメイガ、ハモグリバエ類

5mm目合いのネットが有効な作物と害虫

作物名	害虫名
なす、トマト、菊、軟弱野菜、花き類	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、シロイチモジヨトウ



(図) ハウスのサイドや出入り口など、ハウスの開口部にネットを被覆

がある(図)。なお、高温時には換気不良により高温障害を招くことがあるので換気部分を大きくするなど十分な換気に努める。高温が懸念される場合は、ハウスサイド

果樹



に沿ってネット障壁で囲うのも効果がある。ネットは白色、透明が一般的である。シルバーは害虫の忌避効果が高いが、遮光により生育が阻害されることがあるので注意する。

みかんせん定

◆せん定 昨々が表年の園では、本年は裏年と予想されるので、間引きせん定(枝の分岐部から切る)を主体とする。結果母枝をできるだけ多く残すようにするため、せん定量は少なくし、日陰を作る枝を整理する程度が良い。また、昨々が裏年だった園や樹によってバラツキの出た園は、樹の状態をみてせん定量を判断する。

◆間伐・縮伐

密植園では間伐が重要。隣の樹と枝が触れ合っている場合は、必ず間伐や縮伐を行う。

◆春肥の施用

春肥は新梢の発生や充実、開花後の結実や幼果の肥大促進に重要である。2回に分けて施用する場合、みかん配合(チツソ8・リン酸5・カリ6)を1回

もも

◆病害虫防除

縮葉病は3月下旬以降の発芽・展葉期に雨が多く、風当たりの強い園地で多発しやすい。発芽前に石灰硫黄合剤(7倍/発芽前/―)を散布する。また、3月中旬にはチオソックフロアブル(500倍/収穫7日前まで/5回以内)を枝先にも十分かかるように散布する。

◆摘蕾

ももは着果数の20〜30倍の花をつける。全て開花・結実させると養分が不足し、新梢の伸びや果実の肥大が悪くなる。花粉の多い白鳳などの品種を中心に摘蕾作業を行う。結実の悪い清水白桃などは、結実を確保するために軽めの摘蕾とする。残す蕾の位置は、結果枝の長さで異なるが、どの場合でも枝の基部や上向きの蕾は全て摘み取り、葉芽近くにある蕾を残す。

いちじく

◆霜害対策

春先は遅霜などの被害を受けやすくなる。そのため巻いているわら等を外す時期が早すぎないよう注意する。敷きわら・マルチを早く引きすぎても霜害が起きやすくなるため注意する。

◆病害虫防除

ネコブセンチュウの被害により樹勢が低下している園では、3月下旬にネマトリンエース粒剤(10a当たり20kg/収穫60日前まで/1回)を樹冠下に散粒処理する。敷きわらやマルチを敷く前に散粒し、降雨の後に、敷きわらやマルチを敷くようにする。

*1 農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。
*2 農薬名の後の括弧内は、(10a当たりの散布量/使用時期/総使用回数)を表示しています。

表1 たまねぎの病害の防除に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	病害名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
リドミルゴールドMZ	M03、4	べと病 白色疫病	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	100~300ℓ/10a
ランマンフロアブル	21		2000倍	収穫7日前まで	4回以内	100~300ℓ/10a
ベンレート水和剤	1	灰色腐敗病	2000~3000倍	収穫前日まで	6回以内	100~300ℓ/10a
アフェットフロアブル	7		2000倍	収穫前日まで	4回以内	100~300ℓ/10a
ピシロックフロアブル	U17	べと病	1000倍	収穫前日まで	3回以内	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表2 なすの灰色かび病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
フルピカフロアブル	9	2000~3000倍	収穫前日まで	4回以内	100~300ℓ/10a
ベルコート水和剤	M07	3000倍	収穫前日まで	3回以内	100~300ℓ/10a
カンタスドライブフロアブル	7	1000~1500倍	収穫前日まで	3回以内	100~300ℓ/10a
アフェットフロアブル	7	2000倍	収穫前日まで	3回以内	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 なすのすすかび病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
トリフミン乳剤	3	2000倍	収穫前日まで	5回以内	100~300ℓ/10a
ラリー水和剤	3	4000~6000倍	収穫前日まで	4回以内	150~300ℓ/10a
ベルコート水和剤	M07	3000倍	収穫前日まで	3回以内	100~300ℓ/10a
ダコニール1000	M05	1000倍	収穫前日まで	4回以内	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表4 ほうれん草のべと病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
ランマンフロアブル	21	2000倍	収穫3日前まで	3回以内	100~300ℓ/10a
Zボルドー	M01	500倍	—	—	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※Zボルドーは、野菜類で登録がある。

※一般的に高温時のZボルドー(銅剤)散布は、薬害の発生を招く恐れがあり湿度条件にも注意が必要である。一定の温度下(26度)では、湿度が高まると薬害の発生が増加する。低湿度条件下(湿度70%)では、温度は薬害の発生に大きく影響しないが、高湿度条件下(湿度85%)では、温度の上昇とともに薬害の発生が多くなるので注意する。

※Zボルドーはほうれん草に使用する場合、葉の汚れを生じるので、収穫間近の散布は避ける。

表5 こまつなの白さび病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
ランマンフロアブル	21	2000倍	収穫3日前まで	3回以内	100~300ℓ/10a
ライメイフロアブル	21	2000~4000倍	収穫3日前まで	3回以内	100~300ℓ/10a
ピシロックフロアブル	U17	1000倍	収穫前日まで	3回以内	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※ランマンフロアブル、ライメイフロアブル、ピシロックフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。

表6 しゅんぎくのマメハモグリバエの防除に登録がある農薬

薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
アフーム乳剤	6	2000倍	収穫7日前まで	2回以内	100~300ℓ/10a
トリガード液剤	17	1000倍	収穫7日前まで	2回以内	100~300ℓ/10a
カスケード乳剤	15	2000~4000倍	収穫7日前まで	2回以内	100~300ℓ/10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※アフーム乳剤、トリガード液剤は、ハモグリバエ類で登録がある。

